

「私はあなたたちの老いる日まで背負っていこう」

2012.2.4

わたしはあなたたちの老いる日まで

白髪になるまで、背負って行こう。

わたしはあなたたちを造った。わたしが担い、背負い、救い出す。(イザヤ書 46 の 4)

Even to your old age and gray hairs I am he, I am he who will sustain you.

I have made you and I will carry you; I will sustain you and I will rescue you

神が愛の神、導いて下さるお方であることを、この聖句は親しみやすい言葉で告げている。私たちは一人で老年という時として厳しい状況を歩いていくのではない。必ず神が私たちを担い、背負ってくださるという。

しかも、それは、私たちを創造したのは神であるゆえ、どんなことがあっても、神ご自身が私たちのことを顧みて下さるという。

この短い箇所、原文のヘブル語文では、「わたし」という神ご自身を指す一人称が 6回も使われている。(英訳では原文の強調した表現が反映されている。)

このように、わずか1節のなかで、「私が、私が…」と繰り返し言われているところは聖書全体でもほかにはない。それほどに、ここでは神ご自身が熱心に言い含めるように私たちに向かって語りかけて下さっているのである。

人間は途中までしか面倒を見ることができない。どんなに愛の深い人間であっても、その人自身が重い病気になったり高齢化してくると他の人のことを考える余裕がなくなってくるし、遠いところに離れるとか、心が変わる、考え方が違って来る、あるいは本当のことを言わなくなるといったことで、かつての親密な関係はひび割れ、失われていくも多い。そしていずれかの死によって最終的に失われていく。

しかし、神はいかなることがあろうとも、私たちのほうで神を信じ続けるかぎりは決して見捨てない。それどころか、私たちを背負って行ってくださるという。

この聖書の言葉には、人間というものが自分の足で歩いているように思っている、実は神によって担われているのだという深い見方がある。

たしかに、私たちの呼吸ができること、歩けること、食物が与えられていること等々、日常生活ができていけるのは、自分の力でできていると思いついでいるが、当然の病気や事故でたちまちそのようなことはできなくなる。

すなわち、自分の力を超えたある力によって支えられているからこそ、私たちは生きていて、日々生活できているのである。神が何らかの目的で、ひとたび捨て去ろうとすれば、あるいは罰を与えようとすればたちまち私たちは生きてはいないのである。

信仰を与えられて初めて、実は神が私たちを支え、担って下さっているのだとを感じるようになる。

しばしば荒涼としたこの世にあって、人の世の冷たさや不真実に心を痛み、傷つけられて生きていけないという思いにかられることもある。しかし、そのような時にこそ、このはるか 2500 年ほど昔に言われた言葉が、新たな輝きをもって迫って来て、それによって支えられた人たちは無数にいるであろう。病気や高齢化によってついには私たちは歩けなくなり、寝たきりになる場合も多く、そして最後に死を迎えるであろう。しかし、そのようなときでも、神は歩くこともできない私たちと共にいて、その魂を担い、永遠の御国へと伴ってくださるのである。

野草と樹木たち



ハクサンイチゲ（白山一花）キンポウゲ科 月山にて 2010.7.30

この純白の花は、月山の頂上への急な上りの道に咲いていたものです。付近にはまだ雪渓が一部残っている状態で、この花は、本州中部の高山に咲く野草です。キンポウゲ科の花は、葉がこのような切れ込みのある形をしているのが多く、カラマツソウの仲間や、チシマノキンバイソウ(千島金梅草)、ニンソウなど美しい花も多くあります。

白山にちなんで名付けられていて、イチゲとは、一花と書きます。

高さは、15cm～40cmほど、花の直径は2cm程度です。雪が溶けるころに咲き始め、大きな群落をつくって咲くのも見られます。全く人間の手が入っていないこのような寒冷地の高山の野草、その白さは、またとくに心を惹くものがあります。

空の星、野の花といいますが、とくにこうした東北の高い山々に咲く花は、人の汚れを全く知らない天の国の清められた純白を感じさせるものがあります。

この月山に登ったときには、雨が降るとの予想で、午後でもあり、登る人もほとんどおらず、静寂のなかでこうした神の直接の御手になる植物たちとの交流を与えられたのです。

周囲の緑の草原状の山の斜面には、あちこちにニッコウキスゲやコバイケイソウ、モミジカラマツなどが見られ、野草たちの声なきシンフォニーが奏でられていました。

そして、どうしてこのような、清くて美しい花々が、はるか昔から、だれも人間が登らないような所でも咲き続けてきたのか、その不思議さにも打たれるのです。

神は、こうして予想もしないところに、まただれも見ることのないようなところにも、その万能の御手によって完全な美をたたえたものを配置されているのです。人間の世界にも、私たちの気付かないところに、神のわざなるそうした清い心を蒔いて育てておられるのだと思ったのです。(写真、文とも T.YOSHIMURA)